リハビリテーション天草病院だより

2022年4月　No.102

発行　埼玉県越谷市平方343-1／(医)敬愛会広報委員会

巻頭言

今次診療報酬改定について

医療法人敬愛会　理事長　天草　大陸

診療報酬は２年に一度改定されます（前回改定は2020年４月１日、今次改定分は2022年４月１日より２年間適用）。

医療界全体が病院機能を高度急性期、急性期、回復期、慢性期に分けてその整備を図りつつ、これらの病院が効率的に連携していくことを願っています。今次診療報酬改定も更なる病院機能の分化と連携を重点的に評価することを目指した筈ですが、それにつぎ込む医療費が余りにも貧弱です。何と言っても今次診療報酬改定はプラス0.43％に過ぎないのです。改定の基本方針・理念とその実現を担保する報酬アップ率が大きく乖離することは基本方針・理念そのものを否定することになります。

ここで、私共の病院運営に直接関係する回復期リハビリ病棟入院料（以下、回リハ入院料と略す）に係る改定について触れますが、その前に回リハ入院料の診療報酬体系についてごく簡単に説明します。その診療報酬体系は施設基準によって６種類に分けられております。報酬の高い順から１～６迄に分類されているのです（今次改定で５が廃止され、今迄の６を５に位置付）。ここ数回の回リハ入院料に係る改定を振り返ってみるとほとんど±０で推移しています。むしろダウンしていると言ってよいでしょう。施設基準を厳しくし実質的には報酬ダウンを試みる改定が散見されます。例えば、前回改定では回リハ入院料１で管理栄養士の配置基準が各病棟で１名以上となりましたので、当院では２名の増員を実施しましたが増員に係る費用の補填（報酬アップ）は全くありませんでした。今次改定でも、回リハ入院料１と３で「日本医療機能評価機構などによる第三者評価を受けていることを推奨」することとなり、今迄の例からすると次回改定では、これが『推奨』から「必須」となると思います。だからといって第三者評価に係る費用の助成は全くないものと推察されます。医療費の増額を図ることなく医療機関に負担を強いるこの様な診療報酬の決め方には大きな疑問を感じます。

似たような改定が今次診療報酬で認められます。回リハ入院料１から４の施設基準において「重症患者割合（次頁に詳述）」の引き上げを図ったことです。１及び２については４割以上、３及び４については３割以上となりました。当院の場合、回リハ入院料１ですので、入院患者に占める重症患者割合がこれまでの３割から４割に引き上げられた訳ですから、もし、これが達成されなければ回リハ入院料３の算定病棟に格下げされ、大幅な減収を余儀なくされます。この様な手法での実質的な診療報酬引き下げは許されていいものでしょうか。

上述したような実質的な医療費抑制策は、回リハ入院料に限らず急性期病棟などの他の機能を有する医療機関にも大きな悪影響を及ぼす形で推進されている事実は恐るべき事態です。一旦決定したことをほとんど検証作業なしに施設基準を厳格化することで覆すという手法には断固反対します。

「保健・医療・福祉」知識のひろば

回復期リハ病棟の「重症患者割合」ってな～に

総合企画部部長　杉本　和哉

回復期リハビリ病棟には、職員の充実度やリハビリの実績等に応じて５段階のランクがあります。当院が全病棟取得している最上ランクは最も厳しい条件が課せられており、その中に「重症患者割合」があります。

「重症患者割合」というのは、厚労省が定める評価方法によって重症患者に分類される患者の割合のことで、４月の診療報酬改定で従来の３割以上から４割以上へ条件が引き上げられました。

最上ランクを取得している全国の回復期リハビリ病棟の内の半数は４割以上の条件を満たせないと予想されており、これまで重症患者を敬遠してきたところはランクダウンの危機に瀕しているといえます。

重症患者とは、ＡＤＬの自立度が低い、言い換えるなら介助量の多い患者さんのことで、具体的にどういう状態を指すのかについては「日常生活機能評価」という評価方法を例に説明したいと思います。

「日常生活機能評価」は、右の図に示したとおり13個のＡＤＬ項目について介助の必要度に応じて点数が決められており、全項目の合計点数が19満点中10点以上の場合を重症患者と厚労省は定めています。

例えば、「寝返り」から「移動方法」までの基本的な運動項目と「衣服の着脱」が全く行えない場合には、その項目だけで10点になりますので重症患者に分類されることになります。ほぼ寝たきりに近い状態の方が重症患者であるといえるでしょう。

日常生活機能評価表

患者の状況	得　点		
	０点	1点	2点
床上安静の指示	なし	あり	
どちらかの手を胸元まで持ち上げられる	できる	できない	
寝返り	できる	何かにつかまればできる	できない
起き上がり	できる	できない	
座位保持	できる	支えがあればできる	できない
移乗	できる	見守り・一部介助が必要	できない
移動方法	介助を要しない移動	介助を要する移動（搬送を含む）	
口腔清潔	できる	できない	
食事摂取	介助なし	一部介助	全介助
衣服の着脱	介助なし	一部介助	全介助
他者への意思の伝達	できる	できる時とできない時がある	できない
診療・療養上の指示が通じる	はい	いいえ	
危険行動	ない	ある	
		合計得点	点

※　得点：０～19点
※　得点が低いほど、生活自立度が高い。

当院は、開設当初よりリハビリが必要な患者さんであれば、軽症から重症まで分け隔てなく受け入れてきました。リハビリの評判も相まって、2013年度以降は「重症患者割合」が４割を超えて2020年度の実績では44.9％となっています。

この他に、「重症患者改善割合」という重症患者さんの回復度合いに関する条件もありますが、こちらは３割以上という条件を大きく上回る71.4％(2020年度実績)という結果を残しております。

患者さん・ご家族からのお便り

今「心身共に元気になりました」

越谷市　Ｔ・Ｋ

入院したのは真夏日でした。習い事で突然、脳が回転するような眩暈と吐き気がしました。救急車を呼びましょうの声、静かに頭を押さえる私。サイレン音、着いたのは越谷市立病院でした。診断は脳出血でした。病院の白い壁を見つめながら後悔の日々でした。左半身麻痺で足は痺れ、左手は水が氷水のように冷たく、おしぼりは火傷するような熱さでした。２週間後、リハビリテーション天草病院に紹介状を書きますとお言葉を聞きました。リハビリはきついのかなと全く想像がつきませんでした。転院日に父が手続きに来てくれました。申し訳ない気持ちでした。天草病院へ車椅子で病棟に入り、翌日から歩行器で立つことも歩くこともふらつきがあり不安でした。看護師さんが何でも聞いてくださいと話してくれました。入院前は何事も一人で抱え込んでいました。お言葉を聞いて、過去の自分から解放される気分でした。リハビリは体の硬い所の指摘があり、私の姿勢を見たまま真似してくださり自分の姿を知ることができました。日に日に結果が良くなり、感情が豊かになり冷静に物事を理解できるようになりました。自立して来た頃に退院の文字が浮かびました。入院中のある日、突然電話が鳴りました。父が亡くなった知らせでした。２日前、父と退院を約束したばかりでした。早速私は、一時外出の許可をもらい父と対面しました。とにかく私が元気にならなければと決心しました。翌日から再度リハビリに励みストレッチや頭脳テストも上達しました。リハビリの療法士さんと共通の話で意気投合しました。会話をしながらのリハビリは脳の活性化に繋がります。時には涙を堪え階段の上り下り、そして体力と思考力が身につきました。天草病院でリハビリをして回復できたこと、医療従事者の方々に感謝いたします。

「退院したよ。お父さん」

（投稿日　令和３年11月29日）

「ビッカースタッフ脳幹脳炎ってご存知ですか？」

春日部市　松尾　一寿

私は、５年前にビッカースタッフ脳幹脳炎という100万に１人しか罹らない医者でも分からない難病に罹りました。自分の免疫細胞が自分の細胞を攻める珍しい病気です。主な状態は、複視（物が二重に見える）、運動失調（体幹失調）、意識障害の三つです。私の場合、最初電気が２つに見えるところから始まりました。その後、立てなくなり救急車で運ばれその時は、東京の慈恵医大に運ばれ、とりあえず治療が始まりました。最初は、フィッシャー症候群と診断が出ましたが、血液検査の結果、ビッカースタッフ脳幹脳炎と訂正されました。一日も早い治療が求められ、ギランバレー症候群、フィッシャー症候群もビッカースタッフ脳幹脳炎も治療方法は同じだったから良かったです。幸いにも治療は上手くいきリハビリテーション天草病院も候補に上がりましたがリハビリは、みさと総合リハビリテーション病院に行きました。リハビリも何事もなく無事終わりました。あれから５年後、今度は尿道の痛みで立てなくなり救急車で運ばれました。診断の結果、腎盂腎炎でした。病気は治療が上手くいき治りましたが、熱でビッカースタッフ脳幹脳炎が再発してしまいました。日常生活がままならないので、リハビリテーション天草病院にリハビリのためにやってきました。最初は立ち上がろうとすると血圧が下がる症状で座っているのもやっとな状況で、こればかりは先生から慣れるしかないと言われました。そのおかげで、リハビリが進まずヤキモキしましたが、焦ってもしょうがないと思って、自分に言い聞かせ、リハビリに取り組むしかないと思って取り組んでいます。リハビリをこなしつつ部屋に戻って先生からの自主トレに取り組み毎日を過ごす日々で、心が折れそうになりますが、必ず良くなると自分を信じて取り組むしかありません。必ず今よりは良くなります。自分を信じて頑張って行きます。

（投稿日　令和３年12月22日）

「家族一同感謝しております」

越谷市　黒木暎子の娘たちより

80歳の誕生日目前で、母は脳梗塞で入院しました。脳梗塞と以前からの持病の影響で身体の自由を大きく奪われた中で、リハビリテーション天草病院にお世話になることになりました。転院先としていくつか紹介された中で、天草病院が唯一、コロナ禍においても面会手段を残されていたことが決め手でしたが、機能回復で特に優れた成果を上げられているということで、果たして母が付いていけるか不安もありました。

母にとっては初めての長い入院生活となり、私たち家族にとっても母の容体の変化や不在による戸惑いで入院当初は大変不安になりました。その間、私共からも色々な質問をさせて頂きましたが、病棟スタッフの皆様から細かな情報を頂け、心強い思いがいたしました。

初めて相談室にお伺いしたある日、予約のない訪問にも関わらず、ご担当下さる社会福祉士の方が母の様子を大変よく把握しておられたことに驚きました。この時の感激は、以降入院生活が続くにつれ、診療、看護、リハビリ、介護、相談室、受付、様々な現場に関わる皆様から感じることになり、各部門の優れた機能と、病院全体のチームワークの素晴らしさを痛感しております。

母の入院生活についても、私共家族が思うように見舞うことができない今、多くのスタッフの方々に携わって頂ける環境が母を支えてくださっていることを実感しています。母自身も身体の不自由はありながらも温かな雰囲気の中で、精神的に安定し、感謝の日々を送っていることと思います。患者そして家族の想いにも寄り添って頂ける体制に、家族一同、感謝しています。

コロナ禍での入院という難局を分かち合う入院患者の皆様、ご家族の皆様、共に乗り越えましょう。回復をお祈りしています。

そして温かな医療やサポートを提供し続けて下さる天草病院の皆様、本当にありがとうございます。

（投稿日　令和４年３月８日）

感謝の声（投書箱より）

天草病院の皆様、本当に良くして頂きありがとうございます。母も意思疎通が出来るまで回復しました。面会が出来ない時は看護師さんより、丁寧な説明があり面会が出来なくても安心でした。面会が出来るようになって母を見た時は、意思疎通が出来ていることに驚きました。本当に皆様のおかげでと感謝しています。

天草病院の皆様もお体には気を付けて下さい。　（Ｃ病棟　入院患者様より）

私の部門・部署の多職種連携（1）

A病棟の摂食機能療法の充実への取り組み

理学療法士　村田　佳太（A病棟所属）

A病棟では摂食機能療法の充実の一環として、昨年度よりリハビリの全職種が嚥下ラウンドに参加する取り組みを実施している。目的は、即時的な姿勢の調整や環境設定時の嚥下機能の評価及び担当者との情報共有と方向性の確認である。

頻度は１～２週間に１回程度で、嚥下障害を有する患者様を事前にピックアップしておく。食事場面において、ＰＴ(理学療法士)の介入では嚥下圧生成に悪影響を及ぼしている姿勢パターンの修正、ポジショニング、車椅子の調整を行い、その場でＳＴ(言語聴覚士)による頸部聴診によるリアルタイムの評価を実施する。ＯＴ(作業療法士)の介入では、高次脳機能を配慮した食事環境の提案、福祉用具の選定を行い、同様にＳＴ評価を実施する。こうして得られた情報は、嚥下時の問題点における優位性の判断に役立っている。結果として活用している嚥下ラウンドシートの掲示並びに看護師への情報提供、担当ＰＴ・ＯＴへポジショニングや福祉用具などの直接フィードバックと他職種で、嚥下に関する問題点の共有を可能にしている。

ＳＴはその情報を基に適切な食形態の検討および病棟との連携、医師への上申と包括的な役割を担う。この一連の嚥下ラウンドの結果は次回のラウンドで再評価するため、縦断的な評価を可能にしている。

嚥下ラウンドを中心とした摂食機能療法の充実の取り組みにより、一昨年と比し、全職種で食事への関心が高まり、リハビリ部・看護部共に摂食機能について話し合う機会が増えてきている。

≪ 用語の説明 ≫

・摂食機能療法：患者さんの「食べられない」「食べられない形態がある」ということに対して行うアプローチです。その原因と背景は様々なので、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、薬剤師などの多くの職種が連携しながら、口腔や咽喉だけでなく、全身の状態や環境に至るまで、多様な視点から働きかけをします。

・嚥下ラウンド：食事場面を多職種で観察して、実際の食事の摂取状況から咀嚼能力、口腔機能、嚥下機能、姿勢などに関して評価を行います。課題が発見された場合には、必要な対策を多職種による専門的立場から意見交換を行い、適切な食事の支援方法等を決定して日々のケアに導入します。

関連施設だより

越谷市地域包括支援センター桜井の活動報告

越谷市地域包括支援センター桜井　社会福祉士　岡田　翔太

『地域包括支援センター』とは、各自治体が設置する高齢者の総合相談窓口です。

私たち地域包括支援センター桜井は、越谷市北部の桜井地区を担当し、高齢者に関わる様々な相談に対応できるよう、３つの専門職（保健師２名、社会福祉士３名、主任介護支援専門員１名）と介護予防ケアプラン担当の介護支援専門員、事務員も含め、８名が従事しています。高齢になっても住み慣れた地域で安心して暮らしていくことができるよう、高齢者の方やそのご家族、ご近所の方々、かかりつけの病院やクリニックなど、様々な立場の方からの相談をお受けしています。

【総合相談・権利擁護】

65歳以上の方々のなんでも相談窓口となっている地域包括ですが、令和３年度の新規相談者のうち、９割以上が介護認定を持たない方でした。介護申請の相談や、ケアマネージャーの紹介が相談の多数を占めています。

コロナ禍ということもあり、外出の機会が減り身体機能や認知機能の低下を招いてしまった、もしくは一人暮らしで漠然とした不安を感じている、という相談も相次ぎました。

また、権利擁護業務として高齢者の虐待通報、成年後見制度や不当契約・消費者被害に関する相談もお受けしています。なかには劣悪な環境のケースや病識欠如による病状悪化ケースも見受けられ、当事業所だけで解決できる内容ばかりではなく、市や様々な関係機関と連携し、日々解決に向けた支援に取り組んでいます。

【認知症施策の推進】

昨今の超高齢社会において、65歳以上の方の６人に１人は認知症有病者と言われています。当事業所では認知症になっても地域で自分らしく暮らしていけるように、『認知症サポーター養成講座』を地域の方々に対して開催しています。認知症サポーターとは、認知症に対する正しい知識を学び、地域に暮らす認知症の方やそのご家族に対してできる範囲で手助けをする人のことを言います。令和３年度中は小学校や薬局からのご依頼もあり、地区内で４回の養成講座を実施しました。実際の認知症当事者の方にご講演をいただくなどして、より深い認知症の理解が広まるよう努めています。

【ネットワークづくり】

地域の方に地域包括支援センターの役割を知ってもらうこと、サロンや自治会、スーパーや金融機関などと、双方の顔の見える関係ができることで、問題の早期発見につながります。地域回りの他、お住まいの地域の課題を話し合うための地域包括支援ネットワーク会議を開催することにより、地域の皆様との綿密な関係づくりの一助とさせていただいております。

【さいごに】

コロナ禍が続き、心身ともに疲弊してしまった、というご相談を多くいただきます。ご自身のことやご家族の介護のことなど、お一人で悩まずにどうぞお気軽にご相談いただければ幸いです。

編集手帳

✻日本では令和２年始めに発症したコロナ。この２年以上にわたりコロナ、コロナで世の中は明け暮れました。社会活動・経済活動も大きく抑制されました。世界中が対策に追われ悲嘆のどん底に追いやられました。毎日、毎日を誠に暗い陰鬱な気分で過ごすことを余儀なくされております。

✻このような状況下にある今年の２月下旬、こともあろうに、プーチンの独裁体制下にあるロシアが「ロシア帝国」の再興を狙い、とりわけウクライナ掌握を重視し、恥も外聞もなく同国の侵略に踏み切りました。４月上旬現在の今も、徹底的に虐殺や破壊行為を繰り返しています。核兵器を多数有し兵器類も陸･海･空と圧倒的に有利な軍事大国ロシアの国家犯罪「大量殺人・無差別建物爆撃」は何のおとがめもなしに終結するのでしょうか。さすがに、世界中から非難や経済制裁を受けていますが、中国のロシア擁護とも取れる言動が大変気掛かりです。中国もロシアと同類なのかと疑ってしまいます。

✻残虐・悲惨な「いじめ」の極端な例について上述しましたが、日本の国会審議の与野党のやり取りの中での「いじめ」もテレビの国会中継などを通じて看過し難いものを感じます。勿論、ロシアの悪さとは比べようもありませんが。野党議員の質問が、論戦を挑むのではなく、喧嘩腰で失態を暴き、追求・追求に終始しています。答弁者を困惑させ謝罪させることに力点を置いているようにしか思えませんが、皆様、いかがお感じでしょうか。時にはクイズの様な正解を執拗に迫る質問もあります。この様な与野党のやり取りでは新しい発想に基づく施策が生まれる筈もありません。与野党による国会審議が形骸化しているのです。野党に政権奪取の能力が大きく欠如しているからでしょう。

（理事長　天草大陸）

当法人施設が取得する第三者評価認証

患者さんが病院を評価するには、その病院自身の「自己紹介」も参考になりますが、第三者の評価も重要です。当院では「病院機能評価機構」と「ＩＳＯ」の認証を取得してます。

なお、併設の老人保健施設でも「ＩＳＯ」の認定を受けています。

表紙のことば

これは、患者様と桃の節句を中心に折り紙で飾り付けた作品です。コロナ禍による感染対策中ですが、季節を感じて頂きながら楽しいひとときを過ごすことができました。また色々な種類の折り紙が集まることで、再び皆一緒に楽しめる日が来ますようにとの祈りをこめて作成致しました。

（Ｂ病棟スタッフ一同）